

830 イントロダクション

まず、論述上の作業仮設（仮説ではなく、本来の意味での仮設 hypothesis）として、哲学（philosophy, およびその派生語）や神学（theology）との関係において、科学（science, およびその派生語）が語られるラッセルのテキストを取り上げて、考察の手がかりとしたい。

840 The conceptions of life and the world which we call 'philosophical' are a product of two factors: one, inherited religious and ethical conceptions; the other, the sort of investigation which may be called 'scientific', using this word in its broadest sense. [B. Russell, *History of Western Philosophy*, 1946, 1961², p.13]

845 我々が「哲学的」と呼ぶ、生や世界についての概念は、ふたつの要因の所産である。すなわち、そのひとつは、受け継がれてきた宗教的、倫理的概念であり、もう一方は、この語をかなり広い意味で用いるときに、「科学的」と呼ばれ得る種類の探究である。[ラッセル/市井三郎訳、『西洋哲学史』1, みすず書房, p.1の市井訳を参照したが、訳文は筆者による。]

850 ラッセルのテキストを取り上げるにあたって、ことわっておかなければならないのは、我々は、「科学」の語義や用例、定義を求めているのに対して、次の引用からも一層明らかであるように、ラッセルは、「哲学」を定義あるいは規定するために、読者に既知のものとしての宗教的、倫理的概念と、広い意味で「科学的」探究との二つを用いようとしている。ラッセルは、さらに、この後で、前者（すなわち、宗教的、倫理的概念）を、
855 神学、後者（すなわち、「科学的」探究）を、科学と言い換えることによって、いわば、消去法によって、哲学の規定を与えている。

860 Philosophy, as I shall understand the word, is something intermediate between theology and science. Like theology, it consists of speculations on matters as to which definite knowledge has, so far, been unascertainable; but like science, it appeals to human reason rather than to authority, whether that of tradition or that of revelation. All definite knowledge
865 - so I should contend - belongs to science; all dogma as to what surpasses definite knowledge belongs to theology. But between theology and science there is a No Man's Land,

exposed to attack from both sides; this No Man's Land is philosophy. [B.Russell, *History of Western Philosophy*, 1946, 1961², p.13]

哲学とは、私がこの語を理解するところでは、神学と科学の中間の何かである。神学と同じように、哲学は、これまでのところ、明確な知識がつきとめられなかったような事柄についての思弁から成り立つが、しかし、科学と同じように、伝統という権威であれ、啓示という権威であれ、権威よりも人間の理性に訴えるのである。すべての明確な知識は――私はそう主張せねばならないのだが――科学に属する。他方、明確な知識を超えるものについてのすべての独断は神学に属する。しかし、神学と科学の間には、これら両方からの攻撃にさらされた無人境がある。この無人境が哲学である。[ラッセル／市井三郎訳、『西洋哲学史』1，みすず書房，p.1の市井訳を参照したが、訳文は筆者による。]

先の引用において、ことわられていたように、この箇所でも、「かなり広い意味で」用いられた「科学」は、神学および哲学と区別された諸学問（領域科学）と解することができる（できるということとは、しなければならない、ということではない）が、これは、ラッセルが前提している学問分類がどのようなものであるか次第である。市井訳でも「科学」とされており、ギリシア哲学に言及した次の箇所では、芸術、文学、数学、哲学と並べて「科学」が用いられていることから、読者は、自然科学（おそらく、天文学など）を念頭において読むことに抵抗を感じないであろう。

What they achieved in art and literature is familiar to everybody, but what they did in the purely intellectual realm is even more exceptional. They invented mathematics and science and philosophy. [B.Russell, *History of Western Philosophy*, 1946, 1961², p.25]

ギリシャ人たちが、芸術や文学において成就したものは、万人によく知られているけれども、彼らが純粹に知的な領域で成しとげたことは、それ以上に例外的でさえある。彼らは、数学や科学、哲学を創案したのだ。[ラッセル／市井三郎訳、『西洋哲学史』1，みすず書房，p.13の市井訳。]

これらの引用においては、訳語としての「科学」を、主に、自然科学の意味で理解することも可能であるが、自然科学以外の領域科学を排除するものではないことを銘記するべきである。この意味での「科学」は、ラッセルの文脈では、他の知的営みと区別されるMerkmal（徴標）として、伝統や啓示という権威ではなくて、人間の理性に訴える、ということが挙げら

れている。この場合、直ちに、神学は理性に訴えることがないのか、哲学は理性に訴えないのか、との疑念や反問が生じるであろうが、それは、理性の定義として、どのようなものを採用するかに依存するので、この箇所だけからは確定できない問題として指摘するにとどめる。ラッセルは、むしろ、話を簡単にするために（議論を明確にするために）、意図的に、人間の理性に訴える、ということをして「科学」に限定して用いたとも考えられる。この用法は、しかし、まったく恣意的なものではなく、少なくとも17世紀以降のフランス語（シアンズ）-英語（サイエンス）圏のscienceの用語法に従っている。以下にみるように、パスカルにおいては、外界の事物を対象とする科学的知識と人間に関わる道徳、慣習を対象とする学問的知識の両方について用いられるscienceと、人間に関わることがらを対象とするには適切ではない、純正科学（抽象的科学）としてのscience（シアンズ）の用法とがあることがわかる。

La science des choses extérieures ne me consolera pas de l'ignorance de la morale au temps d'affliction, mais la science des moeurs me consolera toujours de l'ignorance des sciences extérieures. [B.Pascal, *Pensées*, 23-67, Vanité des sciences]^S

外的事物についての科学（学問・知識）は、不幸なときに、道徳を知らないことで、私を慰めることはないだろうが、慣習についての科学（学問・知識）は、外的事物についての科学（学問・知識）を知らないことで、つねに私を慰めるだろう。

J'avais passé longtemps dans l'étude des sciences abstraites et le peu de communication qu'on en peut avoir m'en avait dégoûté. Quand j'ai commencé l'étude de l'homme, j'ai vu que ces sciences abstraites ne sont pas propres à l'homme, et que je m'égarais plus de ma condition en y pénétrant que les autres en les¹⁶ ignorant. [B.Pascal, *Pensées*, 687-144.]
私は長い間、純正科学（抽象的科学）の研究の中で過ごしてきた。そして、そこで人がもち得る連絡・交渉のうち、私をうんざりさせたものはわずかしかなかった。私が人間の研究を始めたとき、純正科学（抽象的科学）は人間（の研究）には適していないこと、そして、他の人たちが純正科学（抽象的科学）を知らないで道に迷うときよりも、私は、人間の研究に踏み込むことによって、私のおかれた状況に一層迷うということがわかった。

¹⁶ Brunshvicg 版に従う。Lafuma版では、l'ignorantとなっている。

1945 エピステーメー（ギリシア語）の訳語としてのスキエンティア（ラテン語）に由来する近代語としてのscienceに対して、ドイツ語のWissenschaftはどうであるかということについては、ここでは立ち入らない。

950 その代わりに、20世紀半ば(1959年)の時点での、次のApostelの発言に注目したい。

955 Sedert ruim een eeuw wordt een ganse groep wetenschappen aangeduid door de namen: "kultuurwetenschappen, wetenschappen van de mens, geesteswetenschappen, sciences morales", enz.... Deze namen dekken niet steeds dezelfde inhoud, en ieder onder hen is de weergave van een bijzondere methodologische opvatting die niet onbestreden bleef.

960 [L.Apostel, *Logika en Geesteswetenschappen*, Brugge, 1959, p.11.]

965 一群の学問(科学, wetenschappen)が、「文化科学kultuurwetenschappen, 人間科学wetenschappen van de mens, 精神科学geesteswetenschappen, 精神科学sciences morales」等という名称によって説明されるようになって1世紀以上になる。これらの名称は、必ずしも同じ内容をカヴァーしているわけではなく、これらのそれぞれは、争われていないある特殊な方法論的な見解の再現である。

970 We zouden niet wensen dat de keuze van onze titel zou doen vermoeden dat wij zekere opvattingen die een wezenlijk en kwalitatief onderscheid zien tussen de methoden der zgn. "natuurwetenschappen" en de methoden der zgn. "geesteswetenschappen", bijtreden. [L.Apostel, *Logika en Geesteswetenschappen*, Brugge, 1959, p.11.]

975 このタイトル(精神科学)を選ぶことで、いわゆる「自然科学natuurwetenschappen」の方法と、いわゆる「精神科学geesteswetenschappen」の方法との間に或る本質的で性質的な区別があるという一定の見解に我々が従っているのではないかと思われることを、我々は欲しないだろう。

980 Apostelは、ウェーテンスハッペンを学問、学知という意味では、エピステーメー（ギリシア語）の意味をカヴァーするものとして用い、特に、精神科学geesteswetenschappenと、自然科学natuurwetenschappenを、本質的に異なるものとする見解に対して一定の距離を置いているように思われる。その上で、ヘーステス・ウェーテンスハッペン(精神科学)

985 の論理（学）を模索しようとするのが、Apostelの意図であるが、ここで、
我々が確認したいのは、wetenschappen 自体は、natuur-とかgeestes-
とかの対象領域を限定しなければ、エピステーメが本来もっていた学知
という（対象領域の広い）意味をもっているということである。このこと
990 を踏まえると、英語圏のscience の訳語としての「科学」を、主に、自然
科学の意味で理解することは、すでに述べたように可能であるが、自然科
学以外の領域科学を排除するものではないことを銘記するべきであるとい
うだけでは不十分であり、むしろ、自然科学以外の領域科学を含むもので
995 あったし、現にそうあらねばならないであろうということが、Apostel の
例から垣間見られるのである（そして、おそらく、取り上げなかったドイ
ツ語の場合も）。

文献

Apostel, L., 1959. *Logika en Geesteswetenschappen*, Brugge.

Pascal, B., 1963. *OEuvres Complètes*, L., Lafuma, Seuil, Paris.

1000 Pascal, B., 1964. *Pensées*, L'edition Brunschvicg, Ch.-M. des
Granges, Garnier, Paris. ²

Russell, B., 1946, 1961². *History of Western Philosophy*, London.
ラッセル/市井三郎訳, 『西洋哲学史』1, 2, 3, みすず書房, 1970.

1005

1010

ホワイトヘッド『観念の冒険』種山恭子訳, p.516上段～下段・原註[1],
ルクレティウス『事物の本性について』, II巻, 216-224行.

1015 Illud in his quoque te rebus cognoscere avemus,

corpora cum deorsum rectum per inane feruntur

ponderibus propriis, incerto tempore ferme

incertisque locis spatio depellere paulum,

tantum quod momen mutatum dicere possis.

1020 quod nisi declinare solerent, omnia deorsum

imbris uti guttae caderent per inane profundum

nec foret offensus natus nec plaga creata

principiis; ita nihil umquam natura creasset.

[Lucretius, *De rerum natura*, II, 216-224]

参考：「哲学」と「思想」の語義

5030 「哲学」，あらゆる仮定を排して事物の根本原理を扱う学。
「思想」，(1)かんがえ。おもい。(2)思考作用の結果生じた意識の内容。
(3)実際生活と密接に関係し，これを支配・統一する，広い考え方。
[金田一京助監修『明解国語辞典』改定新装版，三省堂，昭和46(1971)年]

5035 「哲学」，(philosophy)(philosophiaは愛智の意。西周は賢哲の希求という意を表わすため希哲学と訳し，やがて哲学という訳語が用いられるに至った)世界・人生の究極の根本原理を追求する学問。古代ギリシアでは学問一般を意味し，のち諸科学の分化・独立によって世界・人生の根本原理を取り扱うものとなり，単なる体験の表現ではなく，あくまで合理的認識として学的性格をもつ。

5040 「思想」，(1)かんがえ。考えられたこと。意見。(2)(イ)判断以前の単なる直観の立場に止らず，このような直観内容に論理的反省を加えてでき上がった思惟の結果。思考内容。特に，体系的にまとまったものをいう。(ロ)社会・人生に対する全体的な思考の体系。社会的・政治的な性格をもつ場合が多い。
5045 [新村出編『広辞苑』第二版，岩波書店，昭和48(1973)年]

philosophy, 1) the study of the nature and meaning of existence, reality, knowledge, goodness, etc. 2) any of various systems of thought having this as its base: *the philosophy of Aristotle*, 3) a rule or set of rules for living one's life, esp. based on one's own beliefs and experiences: *Eat, drink, and merry - that's my philosophy*, 4) clamness and quiet courage, esp. in spite of difficulty or unhappiness.

5050 thought, 1) the act of thinking, 2) serious consideration, 3) intention, 4) something that is thought; (a) product of thinking; idea opinion, etc., 5) the particular way of thinking of a social class, person, period, country, etc.: *ancient Greek thought*, 6) attention; regard.

5060 [Longman Dictionary of Contemporary English, Harlow and London, 1978]

filosofia, Ricerca di verità generali, di un sapere capace di procurare un effettivo vantaggio all'uomo.
5065 pensiero, 1) Attività e focalità del pensare, 2) contenuto di ogni singolo atto del pensare, riflettere, immaginare e sim.
[Il nuovo Zingarelli minore, Bologna, 1987]